

## 「徒然菜」

中村 佳菜(61期:立教 平成22年卒)

“つれづれなるままに、日暮らし、鏡にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなくおどりつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。”

皆様こんにちは。中村佳菜と申します。タイトルはもし私がエッセイを出すときにはこれにしようと考えていたものです。この「菜」という漢字はなかなかやっかいなものでして、中国語で私の名は「ジャンツァイ」なのですが、現地の人は皆なぜかプツツと笑う感じなのです。どうやら「おかず」という意味の漢字らしいです。それはそうと私は立教大学舞踏研究会を卒業し、現在荻窪にて社交ダンスの先生をしています。当時は荻窪というと池袋から見て丸の内線の終点。そんなところに生活の拠点をうつすとは思っていませんでしたが、住めば都、良いところ

です。  
2020年、コロナウイルスの影響がここまで長引くとは思いませんでした。1月のUK選手権に出かける際、母親から1通のメールが入り、「変な肺炎が流行ってきているようだから気を付けるように。」とのことでしたが、それが今思えばコロナウイルスのことだったのです。試合とレッスンが終わって帰るころには、普段マスクをしないヨーロッパの人でさえマスクをし、帰りの機内はものものしい雰囲気だったことを覚えています。今年は下克上を果たそうと目論んでいたのですが、一時は仕事をするのもままならず、その後もその時が訪れないままです。スケジュールが真っ白になった分、今は日本で地道に頑張っています。来年は倍返しできますように。

突然ですが、最近思うことを…今年には特に練習時間がたっぷりあるので、毎回の練習をまるごと録画するというのを時々行います。近年ではスマホが発達し(大学時代はガラケーでした笑)、もっと気軽に動画を撮ることができるようになりました。学女の体育館や大会にソニーのスタミナハンディカムを持って歩いていたのが嘘のようです。自分が踊っている動画は気軽にiPhoneで録画できるようになり、Youtubeで国外の有名選手、また過去のグレートダンサーの踊りも見ることが可能です。ただダンスというのは不思議なもので、見たままにやるのが正しい訳ではないのですよね…真逆のことをやっているつもりが正解だったりします。私の師匠もダンスほどペテンなものはないといいますが、極端ですが、レッスンは手品の種を習いにくいようなものではないかと思ったりしています。もうあと何年かすれば3Dで自分の踊っている姿が気軽に見ることの出来る日が来ると思うのですが、そうなるにあつという間にダンスが上手になるかもしれません。

しかし今追い求めているものが、実は初めてステップ講習会でスピントーンを先輩と踊った時のフワッとした感じ、また練習会でクイックステップを習い始めたころのフォワードロックで感じたスピードなどの延長にあるものなのだなあと思つづく感じのところ。ステップ講習会楽しかったなあ。私の代は上手な先輩がたくさんいたので、贅沢だったかもしれません。

最後に学連時代の後悔としては、ワルツのボックスをもっと真面目にやっておけばよかったなど。あれだけたくさんやらないといけないので、正しい知識をもとにベーシックアクションの反復練習をしていたら、もっと上手になっていたことでしょう。赤レンガの正門を抜け、すずかけの径を歩き、板の間(今思うとおもしろいネーミングです)で練習していた時代も懐かしいですが、皆が早くマスクを外して、伸び伸びと踊ることのできる日が来ますように。